

14 さんじんじや なつかわ
三神社(撫川城址内)

光明電王、八幡宮、稻荷宮をお祀りしている社(撫川423)



撫川城址は、野面積みの石垣を持つ古城で「岡山県指定史跡」第一号として指定され、周囲に幅15mの豪池をめぐらしている。

城址内の三神社は、明治になって旧領主戸川氏によって造られた。





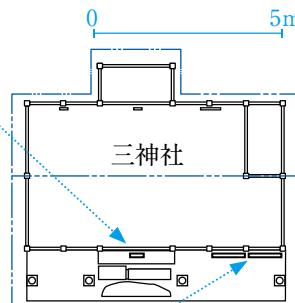
扁額



鳥居



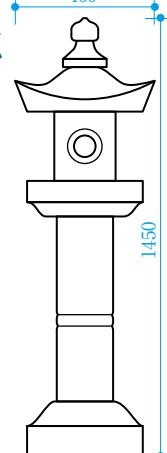
寄附者銘板



三神社



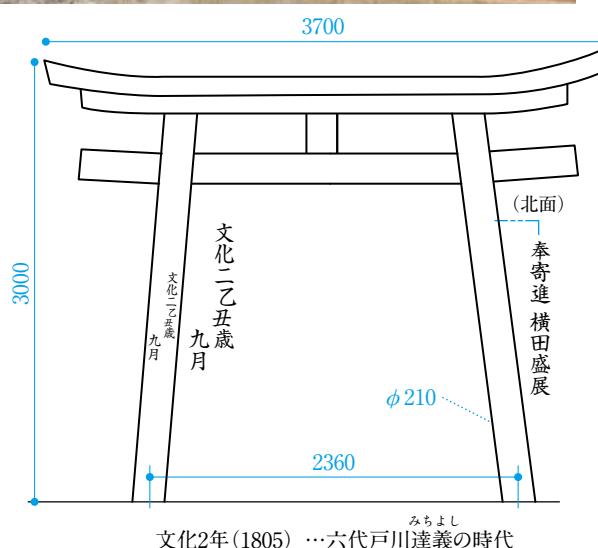
享保17年(1734)は大飢饉の年だった。
戸川撫川知行所は二代達素の治世で、飢饉により年貢を例年より半減し、幕府に借金を仰ぎ、商人に金策を頼むなど窮迫した財政状態だったという。
その中で、寄進した太田さんはどんな人か?



鉢水奉

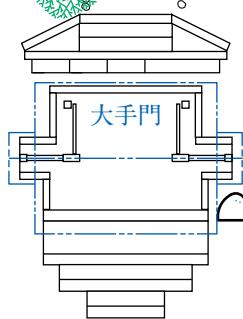


公園名称碑



文化2年(1805) …六代戸川達義の時代

横田盛展はいかなる人か? 撫川八幡神社の玉垣に横田(正三郎)盛貞とある。享保3年(1718)頃の人盛展はその子孫(天保の初期の人)



南面
撫川城址公園

この公園用地は、撫川城址の土地所有者である岡田全殿、佐藤瀧江殿、難波斐太殿、森下亀三郎殿、坂田壽平殿の以上五氏の相続者の方々から岡山市に寄付を受けたものであり、公園開設に当たっては、「撫川城址を守る会」の宮田和正殿、坪井邦太殿をはじめ、逢澤瀧殿ほか多くの方々の尽力によるものである。

三神社の祭神

- ・光明電王
- ・八幡
- ・稻荷

※光明電王は『金光明最勝王経』に雷神として記されている。



三神社の由来(一色節二氏筆)

撫川領主の戸川氏は、もともと戦国大名宇喜多(直家・秀家)氏に仕えていた重臣であったが、達安の時秀家と対立し、関ヶ原の戦いでは東軍に属して戦った。戦後、達安は徳川家康から大名に取り立てられ、備中に2万9200石の領地をあたえられ、庭瀬に陣屋を構えた。大名としての戸川氏は4代安風に嗣子がなく延宝七年(1679)一旦絶えたが、安風の弟達富に知行地(都宇郡下撫川村・中撫川村・日畑村、賀陽郡庭瀬村)5000石があたえられ、旗本として戸川氏嫡流の名跡を継ぐことになった。

4年後、幕府によって庭瀬村と陣屋が召し上げられた際、庭瀬に隣接する当時「古城」と呼ばれていた撫川城址を中心に新たに陣屋を構えることになった。なお庭瀬村の替地として賀陽郡三田村、小田郡宇戸谷村、川上郡ニケ村・九名村・大津寄村・高山村等があたえられた。以後、明治維新を迎えるまで8代にわたってこの地を支配した。

達富時代に作成された「撫川陣屋絵図」には、当時の陣屋の様子が克明に記されている。旗本は江戸在住が原則であったが、陣屋には「御用場」(知行所)や「御蔵」等が設けられ、少数の家臣と武家奉公人が住んでいた。城内には「電王堂」

が造られ、光明電王を祀っていた。その後、八幡、稻荷などの神々が勧請され、堂も安永七年(1778)に新たな社殿が完成し、寛政六年(1794)には修築された。

明治維新を迎えると、最後の領主戸川達敏(彼は高松藩主松平頼胤の一族で、養子として戸川氏の家督を継いでいた)は讃岐に隠棲する際、「本段(撫川城址)」に祀っていた光明電王と八幡・稻荷の三神を合祀し、その保存と維持を旧家臣に委託し、陣屋内の水田1反5畝余をあたえた。委託された旧家臣らは明治十一年(1878)、社殿(本殿修繕、拝殿造営)を造り、三神社と称した。

以来、撫川城址及び三神社は在住する旧家臣の末裔らによって守られてきたが、昭和五十九年(1984)旧家臣末裔の宮田和正らの働きかけにより「撫川城を守る会」が結成され、翌年城内の土地はすべて岡山市に寄付され公園となった。その際、地元有志によって「三神社奉賛会」が結成され、老朽化していた社殿は改築された。その後、「撫川城址整備委員会」等が組織され周辺の整備が進むとともに、住民の奉仕活動によって美しい状態が保たれている。

太鼓橋

太鼓橋は旧屋敷内への重要な表口にして、欄干の敷石に「文化十一(1814)□□石工人 高尾村 中谷新助」と刻んである。(高尾村は現在の妹尾の一部)(きびのさとNo.2より)



撫川陣屋絵図

撫川領主戸川家の文書は、用人を務めていた宮田家に保存されてきたが、令和三年、岡山県立記録資料館に寄贈された。その際、戸川家文書の中にある撫川陣屋絵図は複製(905×905mm)がつくられ、三神社に奉納された。下の写真はそれに翻刻(活字)をしたものである。



拜殿

拜殿の正面には廣陵間寛の筆による「八幡祠」、右側に「光明電王」があり、左側に「正一位稻荷大明神」が掲げてある。



大原宏光氏による表門のスケッチ

大手門・表門

現在の門は、太鼓橋の南にあった大手門を御本壇に移築したもので(明治初年)、何度も手が入っている。

また大手門が移築される前は、戸川家館邸の表門があり、明治初年に岡清三郎が譲り受け本屋敷392番地に移築したが、明治三十年頃に大原八十八の所有になり、(きびのさとNo.2より)1992年に解体撤去された。

表門(1985年撮影・1992年解体)写真=大原宏光氏 大手門



法華曼荼羅

(1797年)
【法華曼荼羅(寛政9年)】

本殿右側に収められた覺如山(不変院)第十一世住職の日顕によって、法華経・天照大神・鬼子母神・十羅烈女・八幡大神などを勧請。

(1844年)
【法華曼荼羅(天保15年)】

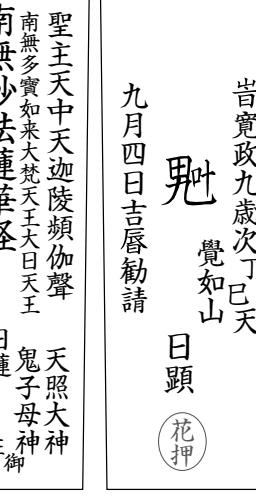
不変院第十五世日侃のもとで社殿の旧札を真札(南無妙法蓮華経 稲荷大明神を中心に、四天王・妙見大明神・八大龍王・天照大神・鬼子母神・八幡大神を周辺に配す)に替える。

表

裏



幅12×高さ34cm



旨 = 時の異体字

表

裏

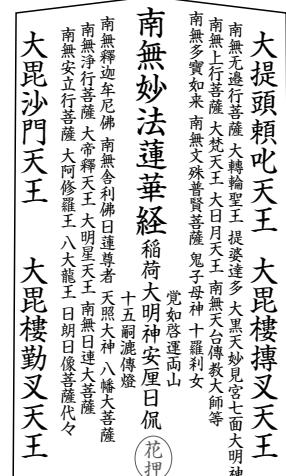


幅15×高さ26.5cm

冠發句集 (1860年)
【安政7年の獻納冠發句集 秀吟五十章】

撫川御本段勸請是迄御真札有之候得共
此度相改奉納者也

旨 天保十五年辰穀九月廿六日



幅197×高さ67cm

拝殿内東面の鴨居に掛けられている。

「當所」(撫川陣屋)のほか「板くら、宮内、茶や町」など近在の居住地が記載されており、戸川家家臣だけでなく、身分を越えて発句(俳句)を楽しむ同好の人々が集まっていたことが想像される。額裏に「願主」として9名の名前が記載されているが、雨水と虫害のため痛みが激しい。

奉納額

これらは昭和60年の改築まで拝殿内の鴨居に掲げてあった。改築時に社殿裏の倉庫に移されたが、後に雨漏り等によって甚だしく腐朽した。平成28年に県立博物館で燻蒸処理をしていただき、現在は社殿内に保管されている。

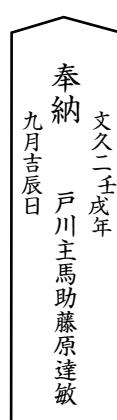


(1844年)
【天保15年12月の額】



幅29×高さ86cm

(1862年)
【文久2年の札】

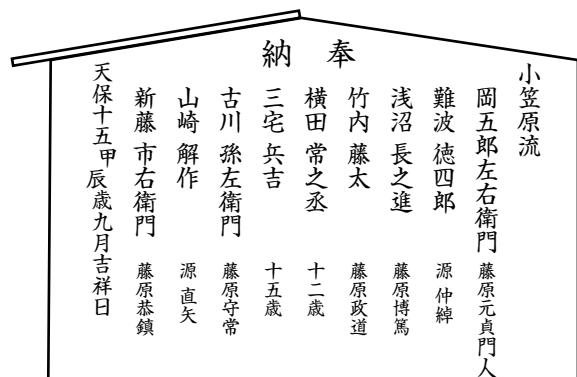


幅34×高さ97(94)cm

(1844年)
【天保15年9月の額】

上部は雨水を含んで破損が著しい。左上隅に「天保十五年甲辰歳」と記載され、下部には8名の記載あり。竹釘を使用している。

※「さびのさとNo.2によれば、当時三神社の拝殿には「岡元貞門人8名による小笠原流の奉納額」が存在したという。これがそれではないかと思われる。おな小笠原流とは弓馬術の礼法である。

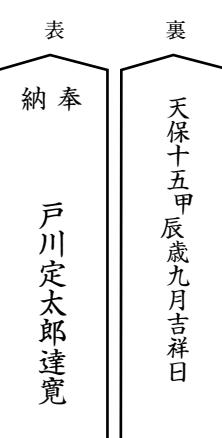


(1800年)
【寛政12年の鏡台座】

鏡は現存せず。
森下氏は戸川氏の家臣。



(1844年)
【天保15年9月の札】



額面上部の左右に矢を装填する輪っかがあり、近くに矢の一部と思われる竹片があった。和釘を使用。

戸川主馬助藤原達敏は八代(最後)撫川領主(旗本)。
戸川定太郎達寛は七代領主である。

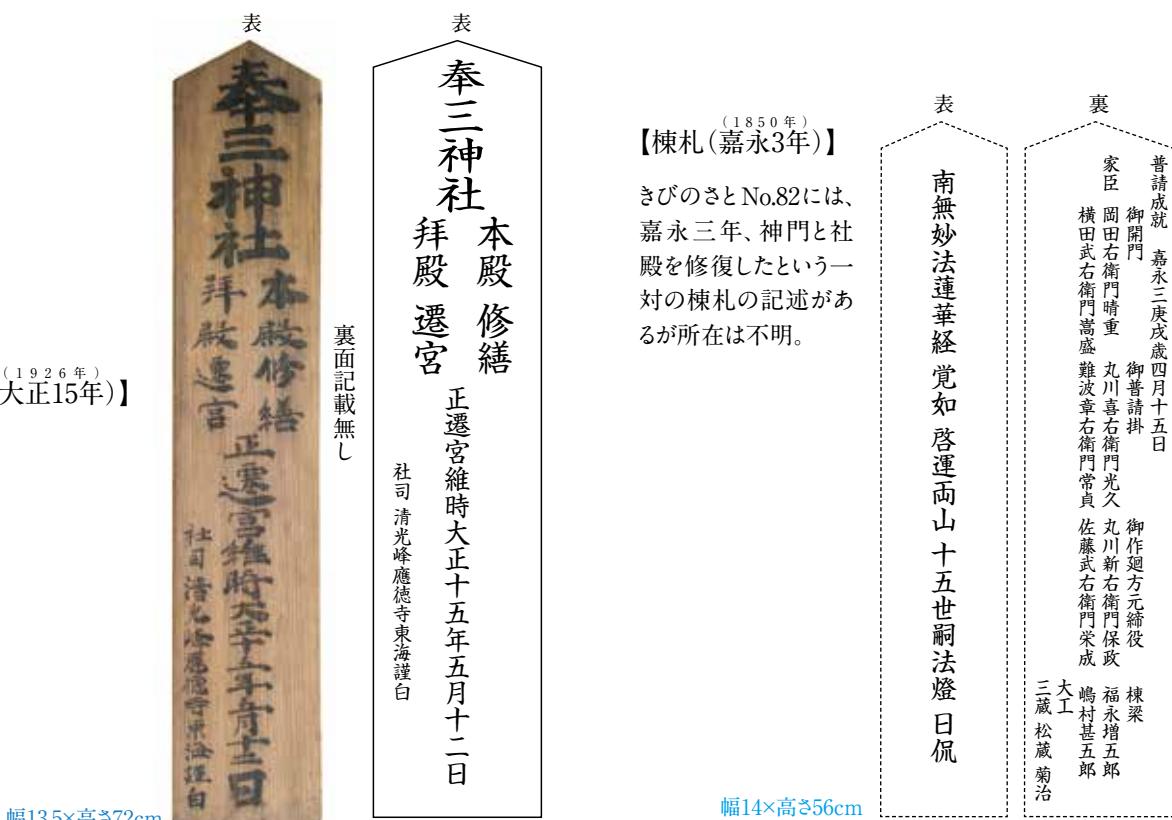
幅34×高さ97(94)cm

棟札

社殿の修理は創始以来数回にわたって行われた。



【棟札(大正15年)】





拝殿軒下に昭和60年修復時の寄附者銘板がある。



撫川城之内三神社修復寄附者

昭和六拾年四月吉日

吉備建 材	荒木慶 三郎	児子伴 郎
吉備建 材	荒木扶 助	荒木扶 助
吉備建 材	池上隆司	池上隆司
吉備建 材	佐藤穂 穂	佐藤穂 穂
吉備建 材	荒木茂 茂	荒木茂 茂
吉備建 材	丸川栄 栄	丸川栄 栄
吉備建 材	難波利子 利子	難波利子 利子
吉備建 材	太田昇 昇	太田昇 昇
吉備建 材	河合三郎 三郎	河合三郎 三郎
吉備建 材	脇本勇 昇	脇本勇 昇
吉備建 材	高木昇 昇	高木昇 昇
吉備建 材	三宅克甫 克甫	三宅克甫 克甫
吉備建 材	中野商店 商店	中野商店 商店
吉備建 材	難波満喜子 喜子	難波満喜子 喜子
吉備建 材	有安正規 正規	有安正規 正規
吉備建 材	河内春彦 春彦	河内春彦 春彦
吉備建 材	横田商店 商店	横田商店 商店
吉備建 材	荒木千代 千代	荒木千代 千代
吉備建 材	荒木石油店 石油店	荒木石油店 石油店
吉備建 材	藤井鮮魚店 鮮魚店	藤井鮮魚店 鮮魚店
吉備建 材	平松良一 良一	平松良一 良一
吉備建 材	岡崎元一 元一	岡崎元一 元一
吉備建 材	難波恒 恒	難波恒 恒



戸川家の系図

